街を「第2の森林」に

みんなのまわりにある建物や生活用品はどんな素材でできているか知っていますか。一戸建てのような低い階の住宅は8割が木で造られ、そのうち半分は外国の森の木が使われています。4階建て以上のマンション、お店やビル、倉庫といった住宅でない建物（非住宅）はコンクリートや鉄骨でできていて、ほぼ木造ではありません。

家具にも外国の木が使われ、生活用品もプラスチックにかわり、日本の木はあまり使われなくなりました。日本の森には、昔の人が将来私たちに使ってほしいと願い、苦労して植え育ててくれた木がこんなにあるのに、もったいないですよね。

この連載で学んだように、木は育つ間に二酸化炭素（CO_2）を吸ってためこみます。「炭素の固定」といい、切って素材になっても木は炭素を固定し続けます。建物や生活用品などの素材をコンクリートや鉄、プラスチックから木にかえる「ウッド・チェンジ」を進めていけば、街が炭素をたくわえて「第2の森林」になるのです。切った後にCO_2をたくさん吸う若い苗木を植えれば、森の手入れが進み、地球温暖化防止に役立ちます。

最近では、燃えにくい加工をした建材や地震に強い工法が開発され、木でお店やビル、マンションが建てやすくなってきました。床や壁に木を使うことで、室内の湿度を調節したり、リラックスできたり、集中力を高めたりするという木の良さも確認されています。建物への「木づかい」がふたたび当たり前になり、地球にも「気づかい」できたらいいですね。

身のまわりのものをウッド・チェンジしていくことが日本の森を元気にします。ぜひ、何がウッド・チェンジできそうか、考えてみましょう。

（長野麻子、株式会社モリアゲ代表）

ウッド・チェンジをみんなで進めていくために林野庁が作ったロゴです

ぬくもり感じる木の校舎

千葉・おおぐろの森中学校

木の香りやぬくもりを感じながら学ぶ学校が千葉県流山市にあります。市立おおぐろの森中学校は木をふんだんに使った教室やおしゃれなラウンジのある図書室、芸術劇場のようなホールを備え、使われる木材の量は約3500立方メートル（25メートルプールで約10杯分）に上ります。

コンセプトは「高台の緑に溶け込む　森の中の木の学び舎」。木造の校舎を増やす国の取り組みを利用して、2022年4月に開校しました。使っているのは千葉県のスギをはじめ、流山市上流の利根川水系や長野県、石川県の姉妹都市のカラマツ、ヒノキなどで95%が国産材です。

使い方も工夫しています。板を縦や横に組み合わせて強度を高めた木材を床や天井に使い、1本の木に見える教室のはりは、板をいくつも重ねて造られました。図書室などの柱は、うすくけずった木をはり合わせたLVLとよばれる建材です。はりの部分は通常よりも多くの木材を使って太くし、万が一の火事の時にくずれ落ちにくい造りになっています。

木材の産地を分けたり、工法を変えたりすることで、特定の産地や製材工場に負担が集中しないようにしました。設計した日本設計という会社の執行役員フェロー小泉治さんはこれを「がんばらない木造建築」と表現します。同時に木のもようなどをあえて見せることで、教育現場らしいあたたかみのある教室づくりを目指したそうです。

学校紹介の動画をつくった3年生の内村祐貴さんは「木のあたたかさを感じられる校舎と、空が見えて開放感がある屋上のプールが好き」と話します。「校則なし」「宿題なし」といった自由で特色のある教育方針の下、540人の生徒がのびのびと学んでいます。

木の教室で学ぶ子どもたち。先生が使っているのは電子黒板で、生徒のタブレットとつながっています＝2023年10月、千葉県流山市

音楽や学習発表会などに使われる多目的ホール。天井はカラマツのLVL、木の枝がのびる様子をイメージしたななめの部分はヒノキが使われています

おおぐろの森中学校の動画 QRコード

通信料がかかる場合があります

木の香りがただよう図書室（上）は柱などにカラマツのLVLが使われています。となりにはカフェのようなラウンジ（下）があり、生徒が勉強や読書に使っています